



日本脳炎を防ごう

今年も「日本脳炎の季節」がやってきました。戦後年々百名を越えていた県下の日本脳炎患者も近年非常に少なくなってきたとはいえ、まだ毎年二十名前後の患者が発生し、しかもその半数が死亡されています。

このように一たん発病すると高い致死率をもつ日本脳炎を防ぐためには、次の三つのことに心掛けねばなりません。

その一つは、日本脳炎ウイルスの媒体である蚊を撲滅し、蚊にさされることのないように心掛けること。

つぎは、予防接種をして前もって体内に免疫をつくっておくこと、そして日頃から節制につとめ、かりに体内にウイルスが入り込んでいても発病しない体力を保っておくよう努めましょう。そのためには、睡眠不足や、過労をさげ十分な栄養をとるようにすることです。

梅雨時の園芸

庭木、新緑の芽が固まり庭木の植替、株わけ、とり木、さし木の適季です。マツの芽つみは鋏を使って上旬まで、花木にはお札肥をやりましょう。中旬から下旬にかけて生垣の刈込み、カキ、ウメ、ブドウの伸び過ぎた枝は五、六枚の葉をのこして剪定を行います。

ツツジ、アセビ、バラの花あと実を成らせる木を勢を消耗しますので早めに摘果を行います。芝生も伸びすぎますから第一回の刈込と施肥を行います。

草花、雨降りが続きますから花壇に水溜りができないよう排水に注意すること。さし芽の適季でキク、ダリヤ、ゼラニウム、ペコニヤ等をさし付けます。

ハゲイトウ、ハボタン、サクラソウ等の播付時季です。秋植球根のチュウリップ、スイセン、アネモネ、ヒヤシンス、クロッカス等の球根は掘上げて十日許り陰乾して貯蔵します。また秋植草花の種子取りもこの月です。

民話



八代の民話 彦一ばなし 河童との潜りくらべ

江上 敏勝

彦一が八代の千仏の堤防を帰っていた所、球磨川に住む大きな河童が出て来て「彦一ちゃん、おっと潜りくらべばしゅかい。」と言った。彦一もこの河童は、いつも子どもの尻ばかりとっているの、

「うん、そろおもしろかる、やるか。」
「彦一ちゃん、こるば賭けしゅか。」
「よかたい。」

「彦一ちゃんが負けたら、おるが友達全部に酒とそうめん、鶏の焼き肉ば、ごっつおせにゃんばい。」

「よかたい、そんなわり、おるが勝たら一年間飲む酒と鮎ばもってけ。そるが出来ん時にゃ、そん皿ばうち破ってよかか。」

「うん、よかよか。」

河童は「こらしめた。」と思って大変喜びいさんだ。堤防で飛びこむ用意をした後、彦一が「こん球磨川は、随分深かけん飛びこむ時にゃ目ばつぶって飛びこむごっつしゅい。」

「こんくんにゃ深さなら、目ばつぶらんとよかばつてん、まあよかたい。」と河童は、一段と嬉しくなって目をつぶったげな。その間に彦一は大きな石を拾ってきておいて

「よかね、一、二、三。」

ドボンと二つ水の音がしたのは、飛びこんだ河童と彦一が投げた大きな石であった。彦一は河童が飛びこんだのを見て急いで家へ帰ってしまったげな。河童は時間が大分たつたから、もうよかろうと思つて浮き上つて見たが、まだ彦一の姿が見えなかつたので、彦一の長息にびっくりして逃げてしまつたげな。

それから、しばらくして彦一の家先に酒一本と大きな鮎の一皿と紙に負けたわびが書いておいてあつたげな。

「彦一ちゃんおるが悪かつた。あきやん賭けばしたばつてん、こつてこらえちくんなり、こりから子どもが尻は取らんけん、皿だけは堪忍して。」それから球磨川の堤防の千仏では、河童が尻を取らないようになつたげな。

(八代七中教諭・市文化財審議委員)



このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

人生詩人

島田 馨也

東京の狛江市の自宅に島田さんを訪ねた。「暗い浮世のこの裏町を、のぞく冷たいこぼれ陽よ」昭和の初め、一世を風靡した「裏町人生」の作詞家がそこにいた。島田さんは「裏町人生」は私自身の人生哀歌だという。幼なくて父親と生別、鉄

屋のデッチ奏公、電信工夫などの職を転々、十九歳で上京、西条八十の門下生となり、赤貧の中から数々のヒット曲を生み出した。レコード作品総数三千余篇。代表作として「裏町人生」「湖底の故郷」「アイルランドの娘」「波止場氣質」「人生航路」「上海ブルース」「或る雨の日の午後」「夜霧のブルース」などがある。

作詞生活四十三年、現在フリー作家。作詞のかたわら、詩歌朗詠をやりステレオLPを出している。

現在、日本詩人連盟、日本作詩家協会の相談役、明治四十二年六月三十日生れ六十五歳。
現住所 東京都狛江市覚東三三四

流浪生活

幼少の頃父と生別しました。母と弟と祖母の四人暮らして、頼る親戚もなく県下各地を転々としましたよ。流浪生活です。八歳の時祖母を失いました。

県下各地といいますが、まず熊本市で生れ、八代、人吉、山鹿、隈府を転々、また熊本という具合でね。学校も当然変りました。熊本市内だけでも碩台、壺川というようにね。

今に見ている

小学校を出るか出ないかで、すぐ小僧奉公にできました。六軒町にひろながという鉄材を売る店がありましてね、毎日汗と油にまみれて荷車を引いていました。十二・三歳の頃です。二十貫もある鉄を倉庫からかついで計量機にかけ、それを荷車に積載して運ぶわけです。たいていお客さんはかじ屋さんか建築材料屋さんで、みんな町はずれにあるんですよ。そのため、どこに行くでも往復すると一日はかかるんです。六軒町から新坂を越え京町から出町まで行くんですが、はすれに山伏塚がありますね、その手前まで行くんです。ご存知のようにあの道は坂ばかりでしょう。歯を食いしばって引き上げるんです。いつも今に見ているという気持ちでした。

